

カンボジア渡航 感想文

香川大学経済学部 3 年

原 雄一郎

まずめに、今回のカンボジア渡航の機会を与えてくださったセカンドハンドの皆さんをはじめ、渡航を後押ししてくださった家族、友人、セカンドハンド・ユースのメンバーに感謝の意を表したいと思います。荷物が届かなかったり、飛行機の出発がキャンセルになったりと予想外のアクシデントに数多く見舞われた今回の渡航でしたが、無事日本に帰って来れたのは、川内さんをはじめ、ともにカンボジアを訪れたユースの首藤さん、三澤さん、日本で私たちの無事を祈ってくださった皆さんのおかげだと思います。これから就職活動など自身の将来について考える機会が増える私にとって、今回のカンボジア渡航で得た経験はその意思決定に反映されるものになると思います。

2 度目のカンボジア渡航であった私にとって、前回の渡航で見たカンボジアと 2 年越しに訪れたカンボジアがどのように違って見えるのか、またどのような新しい発見や気づきを得られるのか非常に楽しみにしていました。前回は初めての海外渡航ということもあり、日本との環境や文化の違いなどすべてが新鮮に感じました。今回は前回のカンボジアのイメージが頭に残っているという状況の中、何がどう違って見えるのか、自分の考え方に変化があったのかなど自己再発見ができる絶好の機会でした。以下、どのような発見があったのか紹介したいと思います。

今回の渡航では、2 つのテーマを掲げてカンボジアに赴きました。一つ目は、「セカンドハンド・ユースが普段どんな活動をしているのかを現地の学生に伝える」こと。私たちが普段日本で行っている募金活動や国際協力イベントへの参加といった活動をどのように行っているのか、メンバーがどのような想いで活動しているのかを現地の学生にお伝えする。前回の渡航ではカンボジアの学生と交流することはできましたが、セカンドハンド・ユースの紹介は出来なかった。その反省を活かし、日本での活動を知ってもらえる機会を創りました。実際、国際協力を考えるにあたって「支援先の国は、海外からの支援に馴れて、支援されることが当たり前になって、自立しにくい状態にある」ということはよく聞く話です。ユースが支援している学生に支援馴れになってほしくない。私たちの活動の先にあるのは、学生が学校に通い、教育を受けることにより自身で物事を考える力を身に付け、将来に活かしてほしい、幸せに暮らしてほしいということにほかなりません。そのためにはユースの活動の意義をきちんと理解してもらえよう場を創ることが必要だと考えました。片言の英語と、活動の様子を撮った動画、スライドを使い、活動を伝えました。すべてを伝えることは難しいけれど、説明し終わった後に、学生から「いつもありがとう」という言葉をいただいたときは、ユースで活動していてよかったと心から思いました。

2 つ目は、「カンボジアを満喫する」こと。カンボジアの一大観光地であるアンコールワ

ットやシェムリアップ、トンレサップ湖の水上村を訪れ、観光気分を満喫することができる機会にも恵まれました。大学の講義で「観光とは、国の光を観ること、国の光を観（しめ）すこと」と学んだことがあります。カンボジアには海外から多くの観光客が訪れ、歴史や遺跡に思いを馳せる。カンボジアにとって観光産業は欠かすことのできない産業であることは言わずと知れた事実ではありますが、観光が国の未来を照らす重要な産業であるということをも身をもって体感しました。

観光でにぎわっている地域がある一方で、スラム街と呼ばれる地域が数多く存在するカンボジア。プノンペンセンソック地区に住む高校二年生のラビ君の自宅にホームステイさせていただきました。ホームステイ先のラビ君と出会ったのは実は 2 年前。前回の渡航でマリノール（ユースが支援している学生が集う NGO）と一緒に交流したうちの一人です。ラビ君の将来の夢は料理人になること。普段からお母さんの料理を手伝っているうちに、料理を作ることに興味を持つようになったそうです。ラビ君の家にお邪魔した時、ラビ君のお母さんが出迎えてくださり、家の中を案内してくれました。家は 1 年前にマリノールの支援により建て直してもらったらしく、ところどころに真新しさが残っていました。夕飯はラビ君とお母さんが作ってくれたソムロームチューサイツという豚肉と空心菜が入ったカンボジア伝統のスープ。おいしくて、ご飯も何杯もお代わりさせていただきました。食後はマンゴーとロンコンという甘い果物を出してくれました。おなか一杯になったところで、家の周辺を散策。この日は近所で結婚式が行われており、夜になっても賑やかな一日でした。散歩をしていて気付いたのが、子どもたちが至る所で遊びまわっていること。そういえば最近子どもたちが走り回っている光景を見る機会が減ったなとふと思いました。家に帰り、部屋の中でお互い片言の英語で、学校のこと、将来のことなどたくさん話しました。ラビ君は分からないことがあれば、一冊の英語の本から言いたい項目を探し出し、指をさして伝えてくれました。ラビ君曰はく「この一冊の英語の本を小さい頃から大切に使っているんだ」とのこと。私は英語の本は何冊か持っていますが、小学生の頃から使い続けている本など持っていない。その言葉を聞いたとき、物があることが当たり前だと思い込んでいる自分がいることに気づかされました。翌日、ラビ君家から出発するとき、お母さんが「私たちにはお金がなくて、あまり何もしてあげられなかったけど、友情関係は忘れない。また会いましょう」と言ってくださった時、涙腺が緩まずにはいられませんでした。住んでいる国や環境は異なっていようと、人を想いやる気持ちはみんなもっている。ラビ君家での体験は私にとって忘れられない時間となりました。

カンボジアから帰ってきて日本の街並みをひたとき、日本に帰ってきたという安堵感とどこか物寂しさを感じました。日本は、道はアスファルトで舗装られ、立派な建物もたくさん建っている。人が生活するためのものは完全と言っていいほど整っている。しかし、カンボジアの街でよく見かけた人同士が至る所で集っている光景や人々が創り出す賑やかさというのがあまり見られなくなった。どちらが正解かという答えはありませんが、異文化を体験できたことで、日本での生活を別の視点から見つめることができるようになったことも

確かです。

今回の渡航のテーマであった「セカンドハンド・ユースが普段どんな活動をしているのかを現地の学生に伝える」こと、「カンボジアを満喫する」ことは私の中では達成できたのではないかと考えています。今後は渡航を通じて得た経験を、自分の言葉で伝えていきたいと思います。少しでも多くの方が、セカンドハンドをはじめ、セカンドハンド・ユースの活動に興味、関心を持ってくだされば幸いです。拙い文章ですが、最後まで読んでくださりありがとうございました。